

SHOW HEY シネマルーム

★★★

バトル・ロワイアルⅡ ／鎮魂歌（レクイエム）

配給／東映

2003（平成15）年7月13日鑑賞

Data

監督：深作欣二、深作健太

出演：藤原竜也／前田愛／竹内力

👁️👁️ みどころ

深作欣二監督は撮影途中で倒れたが、息子の健太氏がその遺志を継いで、パートⅡが完成した。楽しみに観た。しかし結果は・・・？残念ながら大きく期待はずれ！七原秋也たちテロリストの活動が何も描かれていないため、背景事情がサツパリわからない。わかるのは「戦艦島」で延々と続く銃撃戦のみ。「わめき声」が続き、その合間では、わかったようなわからないような「議論」。ちょっと「薄っぺら」すぎるのでは・・・？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<BRⅡへの期待>

全国の中学3年生の中から無作為に選ばれた1クラスを、最後の1人になるまで殺し合わせる新世紀教育改革法・通称「BR法」……。そして3日以内に自分以外のクラスメイト全員を殺すしか生き残る道はない、といういかにも突飛かつ過激なテーマを設定した第1作目の『バトル・ロワイアル』（2000年）は刺激的で、結構面白かった。そして問題提起としても十分な意味と説得力をもっていた。

そのパートⅡを制作していた深作欣二監督は製作途中で死去し、息子の深作健太氏がそれを引き継いだ。何回も観た予告編で印象的なシーンは、①東京のビルが爆破されるシーン、②「すべての大人に宣戦布告する」という七原秋也のメッセージだった。そういう意味で私のBRⅡへの期待は結構大きいものがあつた。

<期待はずれ—首都爆破シーンはイメージだけ>

七原らの「テロ集団」はどんな組織体制で、どのように「すべての大人たち」と戦うの

か？東京のビル群の爆破はなぜ、どのようなストーリーで実行されたのか？私の期待はいろいろと膨らんでいた。しかし残念ながらこれらの期待はみごとに裏切られた。つまり現実にはこれらのシーンは全くなく、首都爆破シーンはイメージだけだったのだ。そして七原らの「テロ集団(ワイルドセブン)」の行動を示すシーンは、回想シーンと七原のメッセージの中で少し解説されるだけで、実質的な内容はほとんどない。これでは肩すかし。期待はずれと言わざるを得ない。

<理解しておくべき状況設定>

この映画の前提事実として理解しておくべきことは次の3点だ。すなわち、

- ①BRを生き抜いた七原秋也と中川典子が日本を脱出して2年、世界はテロの時代に突入した。
- ②BR法国家に抵抗する者たちにより首都が爆破され、国家は七原がその凶悪テロリスト犯と断定、国際指名手配した。
- ③首都崩壊から1年。反BR法組織「ワイルドセブン」のリーダーとなった七原はすべての大人に宣戦布告し、大人たちは七原を抹殺するため、正義の名のもとに新しいゲーム新世紀テロ対策特別法・通称「BRⅡ」を開始した。

このBRⅡについては、映画の中では十分に解説されていないものの、パンフレットには新世紀テロ対策特別法「BRⅡ法」の前文と条文(1-11条)の全文が掲載されている。

<BRⅡ法と有事関連3法>

平成15年6月の国会で有事関連3法(武力攻撃事態対処法、改正安全保障会議設置法、改正自衛隊法)が成立した。とくに武力攻撃事態対処法はその名のとおり、日本が武力攻撃される事態となった場合の対処法を定める重要な法律だ。さらに来年の国会では、日本有事の場合の法制として、その柱となる武力攻撃事態対処法の他、①国民保護法制、②捕虜に関する法制、③非人道行為処罰法制、④自衛隊の行動円滑化法制、⑤米軍支援法制に関する法案を一括提出する方針を固めたと報道された(平成15年7月12日 読売新聞)。これらの有事法制は、今の日本にとって非常に重要かつ現実味を帯びた法律だ。私は弁護士という立場で、これらの有事法制に相当するようなBRⅡ法の全文を何度も読んだが、つくりものの映画という割引をしても、これはやはりもうひとつ不十分な内容だ。

<BRⅡのスタートとそのルール>

この映画の実質的なスタートは、町立鹿之砦中学校3年B組42人の乗ったバスが、軍に拉致され、担任教師RIKI(竹内力)が、BRⅡルールを説明するシーンからだ。RIKIが説明するBRⅡのルールは次の3つだ。すなわち、

- ①孤島に立て籠もったテロリスト・七原を見つけて殺せば勝ち。
- ②制限時間は3日間。
- ③ペアタッグマッチ（男女のペアのどちらか1人が死亡すれば自動的にもうひとりの首輪が爆発し死亡する）。

<延々と続く戦闘シーンとわめき声>

町立鹿之砦中学校3年B組のうち、BRⅡ法への参加を拒んで、既に死亡した2名を除いた40名は、七原ら「ワイルドセブン」がたてこもる島（通称、戦艦島）に向かった。かなりの重装備で、手にするマシンガンも高性能だ。しかし島へ上陸しようとする「戦士」達には島の砦から容赦ない爆弾の嵐が……。そして次々とクラスメイトは死亡。砦にたどり着いた時は、既に半数以下となっていた。

やっと砦の中に入った残りの者も、おとり戦術にはまってしまった。

この戦闘シーンは延々と続く。1人死に、2人死ぬたびに、叫び声、わめき声が飛び交う。また、彼ら中学生「戦士」の動きはかなり感情的。1人親友を失うと、ワーとわめきながら飛び出していくから、また撃たれてしまうパターンの繰り返しだ。

終始一貫して、1人だけ冷静な女生徒が、教師北野の娘であるキタノシオリ（前田愛）。彼女の行動だけは、冷静で合理的で説得力がある。例えば、彼女の相棒の黒澤凌（伊藤友樹）が、友人を助けるため飛び出そうとすると、相棒に銃を向け、「勝手に死なせない！」と言うところなどは見上げたもの。中3の戦士はみんな、彼女の冷静さと合理性を見習うべきだろう。

砦の中では戦いと同時に「議論」も盛ん。テロリストとして砦にたてこもる七原と突入組の青井拓馬（忍成修吾）を中心として、盛んにテロの意義、戦いの意義、失った仲間達への哀悼、今後の見通し等について議論されるが、その議論に十分な説得力があるとは思えない。

<ホンモノの軍隊の出動>

結局、七原は、突入組を助け、その首輪を切断した。そこで担任教師RIKIは、ホンモノの軍隊へ出動を命じた。そこでまたまた戦闘シーン。テロリスト集団の「全滅」は目に見えているはず……。しかし……。そのつくり方は深作監督とは思えないほどワンパターン。戦闘の中で1人が死ぬたびに、誰かが側に来て話しかけ、そして回想シーン。それが終わるとまた次の戦いという繰り返しだ。また、イラク戦争でアメリカの近代兵器の力をありありと見せつけられ、ピンポイント空爆の威力を知っている私達には、なぜテロリストがたてこもる砦を落とすのに、こんなに犠牲の大きい「地上軍」の投入をするのか？と思わず原点にもどった疑問を感じてしまう。テロリスト達はイラクや北朝鮮の軍隊のように地下防空壕にたてこもっているわけではないのだから、地上軍で戦う必要はなく、

空から飛行機で爆弾を落したら一発のはずなのだ。もちろん、ストーリー構成のためには、そんな野暮な話はなしでいいのだが、これだけ延々と「地上戦」のシーンが続くと、思わずそんなことを考えて、笑えてしまう。

<テロリスト集団ワイルドセブンの力量不足—七原秋也のアピールも説得力なし>

12月25日のクリスマス。七原秋也のアピールが全国ネットで流された。そのアピールの趣旨は、①アメリカがここ60年の間に攻撃した世界の国々を1つずつ挙げて、アメリカの1人勝ちを指摘、②しかしその攻撃の中でも明るさを失わない子供達の未来を信じ、その連携を訴え、③そのため最後まで世界の大人達との戦いを続けることを宣言する、というものだが、これも論旨が不明で説得力がない。

BRを生き抜いた七原秋也と中川典子（前田亜季）は、アジア諸国やアフガニスタン、イラク等を歩いてテロリスト達との連携を深めたことをうかがわせるシーンが随所にあらわれる。七原がもつ銃は、テロリスト三村真樹雄（千葉真一）が愛用していたAK-47（カラシニコフ）だ。2年間のテロ活動の中で、筋金入りのテロリストになったはずの七原秋也（藤原竜也）だが、あまりにも美少年(?)すぎて、何となく天草四郎時貞の風貌。これではテロリストの凄味はとて表現できていない。

<マンガ的なラストシーン>

戦艦島での戦闘が終わった後、アフガニスタンかイラクかと思わせる某国で、七原と青井、そして生き残りの仲間達がターバンを巻いて再会するシーンに移る。ここでは本来ならば涙が溢れてこなければならぬところだが、ちょっとマンガ的。

今の平和国家ニッポンで、アメリカによる世界の一人支配の問題点やテロの恐怖を本当にアピールするには、この程度のストーリーでは薄っぺらすぎるのではないだろうか・・・。

2003（平成15）年7月14日記